雑事記（27）

［エッセイ2題］

戦争遺跡探訪（6）

①千代ヶ崎砲台跡

２０１７年３月１７日、私は、先に申し込んだ返信のはがきに従い、浦賀駅よりバスに乗り、最寄りのバス停で降りてからはやや長い上り坂の道を歩いて現地に集合した。この日は千代ヶ崎砲台跡が一般公開された。

東京湾砲台遺跡の一つに指定される千代ヶ崎砲台跡を見学しに来たのだ。千代ヶ崎は、浦賀港の入り口付近の高台にあり、三浦半島と房総半島のあいだの、狭（せば）まった東京湾の海域をにらんでいる。広域的な地図でみると、久里浜～金矢の東京湾フェリーの航路にも近い。

この遺跡を一般人が見学するのは限定的だ。普段は立ち入れない。互いに見知らぬ間ながら同好の士（?）が集まっていた。バス停でバスを待っていたとき、すこし言葉を交わした若い女性もそんな一人だったことは意外だった。浦賀市の職員の案内で、詳しい説明を聞きながら、集まった人たちとグループ分けされた中の一員として見て回った。

ここは榴弾砲の陣地として明治期に作られた。東京湾に侵入してくる外国船に対する防備施設の一環だった。ただし、観音崎砲台跡や猿島、第三海保などと同様に、昭和になってからは旧態化していたが、防備の拠点となっていた。今では、もちろん大砲をはじめ兵器に属するものはないが、地下空間の建築構造や通路がよく残っている。

基本的にレンガ造りの建築物だ。ほとんど地下構造で、丘の上を掘り下げた造りになっている。砲はすり鉢状の底面にすえつけられたから、海の方から見ると、砲身などは隠れてしまい、野山にしか見えなかっただろう。榴弾砲は空に向けて弾を高く打ち上げ、放物線を描くように飛ばし、海上の敵船に命中させる仕組みだ。

戦後、自衛隊の管理地になったとき、この凹みの部分を土砂で埋めてしまい、平地にしてテニスコートにしていたという。長年土砂で埋めていたから、状態が

盛丘 由樹年

よく保たれたといえる。近年、その土砂を部分的に取り除き、遺跡として見学できるように復元したわけだ。近年、戦争遺跡の一つに指定された。

壁などをよくみると、取っ手や蝶番などの金属類を強引に抜き取った跡がところどころにある。案内人によると、戦後のどさくさで、金属部品類は持ち去られたという。戦後でなく、戦中かもしれないが、それも歴史の1コマを示すものだろう。

レンガや石材で作られた
地下道や地下室

②茅ヶ崎城址の戦車壕

茅ヶ崎といっても湘南の茅ヶ崎ではなく、横浜市都筑区にある。横浜地下鉄の「センター南」駅から東に歩いて7分ほどのところに茅ヶ崎城址公園がある。私は6月19日に、午後に横浜・桜木町へ行くついでに、午前中ここに寄ってみた。

この辺りは地下鉄が通ってからめざましく発展し、都市化が進んだ地域だ。駅前には商業施設や公共施設

底部に砲台の跡

が立ち並び、中層の集合住宅が建てられた。駅から少し離れると、不ぞろいな新築戸建ての住宅が多く見られる。

公園入口からの上り階段

そんな住宅地域のなかに小高い丘があり、草木が生い茂っている一角が茅ヶ崎城址公園だ。近年まで寄合地として里山の状態で保持されていたため、中世の城址が比較的状態よく残っているという。今では、区が管理する公園として整備され、要所に多くの案内板が立てられ、説明文や絵図が掲示されている。高低差もあまりなく、規模が小さいため、見て回るのに時間がかからない。コースの大半がロープで仕切られているから、見て回れるところが限られている。復元された櫓（ろぐら）や館（やかた）などはないけれど、確かに中世の城址であることがよくわかる。丘の斜面や壁面に注目してみて回った。ロープを超えて藪の中に入りたかったが、あきらめた。

私の目的は、城址をみて回ることではなく、実は太平洋戦争時の「戦車壕」を見つけることだった。ネット情報によると、「ある」というものと「ない」というものがあり、私は確かめたかった。結論的にいうと「あった」というのが正しい。「茅ヶ崎城址に戦車壕らしいものがある」とネット上にレポートした人は、土塁や空堀の跡を見まちがえたのだろう。

私は、城址の周囲を歩き回って、事情をよく知る地元の方に聞くことができた。その初老の男性の方は、道路わきの小屋の中で、この付近では珍しくなった農機具の手入れをしていたから、地元に長くいる方だろうと目星をつけた。この辺には、高齢と見えても新入

居の方が多くいるのだ。彼の話によると、終戦近くなったとき、茨城の方から兵隊がやってきて、北側斜面に5、6カ所で横穴を開けたという。でも、そこは茅ヶ崎城址の斜面ではなく、近隣地域のそれであり、向こうにあるマンションが建っているところだという。小屋の壁に貼り付けた地図のようなものを指差し、「この辺だ」と言うが、私にはよく見えなかった。B-29は南の方から来るので隠れるように北側の斜面に作ったのだろうという。戦車を入れるための穴というから「戦車壕」と呼んでいたが、戦車の姿は見たことがないという。その壕車壕は近年の開発工事によって全部つぶされたそうだ。

茨城に戦車部隊があったことを私は知らないが、兵隊たちが壕車壕を掘ったのは確かなようだ。でも戦車の利点は機動性を持っていることだから、壕の中に入り、閉じこもっていては役立たずになってしまう。敵が近づくまで身を隠しておくためのものだろうか。しかし、まちぶせのためなら、戦車でなく、大砲をすえつければいいことになるが……。陸軍はこの辺の地域でも戦闘が起こりえると予測して(本土決戦のために)戦車壕を造ったのだろうか、と私は憶測した。たぶん、空をわがもの顔で飛び回る敵機に見つかったら、すぐに攻撃されてしまうから、隠すしかなかったのだろう。この時期、飛行機を隠すための掩体壕も各地の飛行場周辺に多く作られたから、同じようなことだった可能性が高い。

その人によると、戦争の名残といえるものとして、近くにある正覚寺の境内に学童疎開の碑があるという。もしも本土決戦になれば、疎開先の児童が戦闘に巻き込まれることになるかもしれなかった。それだけではないけれど……。

③横沢入の戦車壕

戦車壕といえば、「横沢入の戦車壕」が戦争遺跡マニアにはよく知られているところだろう。ちなみに横沢入の「入」は山間の谷筋を意味するようだ。地図上では横沢となっている。(横沢と横沢入の違いが、私にはやや気になった)

6月17日(日)、私は東京都あきる野市横沢地区の山間部に行ってみた。拝島駅からローカルな五日市線に乗り換え、武蔵増戸駅で降りてから、ハイキング気分で横沢入を歩き、戦車壕を探してみた。横沢入では、湿地帯の中に棚田が広がり(多くは耕作放棄されている。マムシに注意という立て札もある)、山に囲

まれている。里山保全地域として指定され、それなりに整備・管理されている。

里山見物に来ていた人たちに出会った

山の斜面に沿って歩いていくと、確かに戦車壕がいくつか残っており、私は3カ所を見つけることができた。通路面から高さ3メートルほどの斜面に横穴が開けられている。横穴を覗き込む人が多くいるらしく、そこに至る斜面には草が生えず、土面になっているから、一目でわかる。

荒っぽく削られ、穴があけられている

ただし、コースにそれて、草木に覆われた、見つけにくい壕もある。私はそれもしっかりと見つけた。横穴の直径は1メートルほどであり、実際に戦車を入れるには小さすぎる。年月がたち、土砂で埋まって入り

口が小さくなったのかもしれない。人の手で半分埋め戻されているようでもある。

入り口が半分埋め戻されている

湿地帯のため、いくつかの水路を渡るとき、橋の代わりをするように、車のシャシーのような鉄製の物が置かれているのを見つけられる。二、三あり、橋を補強するためだろう。それは錆びついており、かなり古いものに見える。ネット上では、それを「戦車のシャシー」とする説が出ているのだが、トラックのシャシーというところだろう。ともあれ、戦車を「戦車壕」に隠すために運ぶ際に、ある程度の重さに耐えられるように架けられものだろう。これを戦争遺跡（遺物）とするのは、やや微妙なところだ。

戦車のシャシーとの説もある
鉄骨構造の仮橋

こんな山間部に戦車壕をつくるのは、戦略的には意味がない。待ち伏せ攻撃のためのものではないだろう。単に戦車を隠しておくためだけに造ったと考えられる。

私はハイキングコースをたどり、山の中腹にある神社や石切り場跡（石山ノ池）を巡り、横沢入の中央付近に戻った。管理小屋のそばに手書き絵図の案内板があった。それを見ると、コース沿いには４カ所の「地下壕」があることになっている。公式には「戦車壕」ではなく「地下壕」と言い換えている。地下壕という名称には私は違和感を持ってしまう。単に「横穴」ぐらいでいい。

④東京都市大学のＢ‐２９エンジン

６月２５日（月）私は東急大井川線の等々力駅から歩いて、東京都市大学世田谷キャンパスに向かった。そこにＢ‐２９エンジンが展示されているというので見に行ったわけだが、世田谷キャンパスに行くには、隣駅の尾山台駅が一番近い。暑いから、清涼な等々力渓谷を通っていこうと思った。木陰が続き、涼しくていい。都会のオアシスとの呼び声の高いところだ。でも、初めて訪れた感動はもうわき起こらなかった。等々力渓谷をすぎ、炎天下の道を遠回りしながらも、なんとか大学にたどり着いた。

正門近くの守衛室で一言告げると、（不審者の私でも）意外にすんなり入れてもらえた。２号館１階の中央通路の一角にそのエンジンがある。ターボチャージャー付１８気筒星型複列空冷エンジンだ。このエンジンを搭載していたＢ‐２９は、１９４５年５月に撃墜されたものだ。時期的に横浜大空襲で飛来したなかの一機だろうと言われている。

そのときの２発が学術研究のため、東京目黒区大岡山の東京工業大学に持ち込まれ、１発は実験室で分解されたが、もう１発がほとんど手付かずのまま残されていた。その後、実験室が解体撤去されることになったとき、東京工業大学教授だった一色尚次氏や、その実験室の出身で調査に携わった古浜庄一氏らが尽力し、古浜氏は当時武蔵工業大学の学長になっていたので、１９９４年に武蔵工業大学でそれを引き取り、保管することにした。東京都市大学の旧名が武蔵工業大学だ。

展示されているエンジンは、ターボチャージャーなどの補機はなく主にシリンダー部分があるだけだが、よく見れば、かなり状態よく残っている。実際に研究した結果でも、彼らが驚くほど高性能エンジンだったことが判明している。シリンダーヘッドの冷却フィン

の構造や、中空ナトリウム冷却弁をバルブに使うなど、最先端技術を駆使したすごいエンジンだった。それらは戦後日本の自動車エンジン技術に影響を及ぼした。

Ｂ－２９エンジンが展示されているフロアの一角で不審者が覗き込んでいる

アメリカでは（クライスラー社製）こういう大型の高性能エンジンを量産できたことがさらにすごい。熟練工に頼らず、流れ作業で作られたのだろう。日本では、同類のエンジン（たとえば「誉」エンジン）を製造するのに四苦八苦していた。こんなエンジンを４発も備えた航空機を撃墜する日本の戦闘機も、それなりにすごい。至難の業だった。

青梅市郷土博物館にも、Ｂ‐２９エンジンの一部が野外に置かれているという。それは「残骸」というべき状態だというので、私は探訪しに行くのをためらっている。

⑤若獅子神社の九八式中戦車

これも残骸だが、ほぼ全体が残っているので一級の展示品だ。私は、機会があれば行こうと計画している。とりあえず、ネット情報を基にして概要を紹介したい。

若獅子神社は静岡県富士宮市上井出の地（富士山頂から１３ｋｍ西方）にあって、戦争中は陸軍少年戦車兵学校があったところに建立されている。この周辺にその門柱などの痕跡が見られる。その兵学校は２０歳以下の少年を戦車兵として育成するための機関だった。昭和１７年から終戦まで合計２４００名がこの兵学校に入った。戦車兵は当時、航空兵とともに少年たちのあこがれの軍務だったから、体力知力ともに優れた選抜された者たちが集まったことだろう。富士山の西側

に位置する広大な地で、訓練が行われていたわけだ。
この学校から出征した若者たちと教官約６００人が亡くなった。彼ら若者は「若獅子」と呼ばれたから、慰霊のための塔や神社が、その名を冠して戦後２０年たってから建立された。
彼らが訓練を受け、実戦で用いた主な戦車が、九八式中戦車だった。日本軍の主力戦車でもあった。その戦闘力は、世界水準からすれば――あまり言わないでおこう。
戦後３０年たってから、激戦地のサイパンで地中に埋まっていたものを掘り出した。帰還戦車といって、有志が尽力し、日本のこの地に移送したものだ。移送した戦車はもう一台あって、それは靖国神社の遊就館に展示されているという。そちらの方は修復され、彩色も施されている。そうなると、大きな模型に見えてしまうので、興ざめだ。
若獅子神社の境内にあって、これは屋根付ながら、かなりオープンな形で展示されている。こちらは、なまなましい。戦闘の激しさがみてとれる。車体にはところどころ弾痕がついている。戦闘を体現している。戦車部隊がサイパンの守備についていたが、侵攻してきた連合軍によって壊滅してしまった。その一台がこの九八式中戦車であり、この兵学校出身の戦車兵が操縦していたものという。亡くなった方の中に教官もいたというから、戦況としては相当にひどかったことがわかる。（彼らは教官が横についていないと、運転できなかった？　路上運転の教習のように思えてしまう）

若獅子神社の九八式中戦車
短い砲身が下を向いている

彼らの必死の抵抗むなしく、１９４４年６～７月にはマリアナ諸島のサイパン、グァムが連合軍に制圧された。そして連合軍はサイパン、テニアンを前進基地にし、本土爆撃を開始する。そこから毎日のように、Ｂ－２９の大編隊を飛ばした。日本の主だった都市を炎上させ、戦闘員であろうとなかろうと無差別に殺戮し、死体の山を築いた。それをふまえると、サイパンには観光気分で行ってほしくない、と私は思ったりする。戦争遺跡探訪ならいいと思うが……。

カラスの襲来

・入浴客たちはカラスの賢（かしこ）さに感心していた

ある日（２０１８年３月ごろ）鶴巻の温泉施設に行ったとき、露天風呂のところで老齢の男たちが周囲の岩に腰掛けたりして、長話をしていた。聞くともなしに聞いていると、カラスの話で盛り上がっていた。

「カラスがせっかく植えた種をほじって食べてしまう」「ビニールシートをかぶせても、大して効果ないよ」「おれが種をまいているところをどこからか見ているんだ」「彼らはあたまがいいから、案山子（かかし）を立てるぐらいじゃ、ぜんぜん警戒しないよな」「タカの目のようなオモチャをぶら下げても効果ないよ」「カラスを捕まえるワナがないかな」「大掛かりなワナがあるらしいね。専門業者を呼ぶしかないが、そんな金ないしね」

「鳥類学者によると、日本にカラスは２種類あり、互いに交雑することはないというから、オレたちよりえらいよ、ヒトはすぐ交雑しちゃうもんね」「時と場合によるかもしれないけれど、女も男も交雑したがるのは確かだね。ふだんは抑えているところがある」「鳥

類学者は交雑するかどうか、じっと覗(のぞ)いていたのだろうか」「いろいろ調べかたがあるんだろうよ」「変なことを想像させるなよ。まずいよ、裸だし……」

彼らはこの辺の農家の方であり、その畑がカラスによく荒らされるらしい。大して関心もなかったし、よく聞きとりにくかった部分があるので、私が一部補足した。

・ハトのえさをカラスが横取りした

その筋の係員に「野鳥にえさを上げないでください」と言われてしまいそうだが、私は某市の「空中庭園」（バスターミナルの上に作られている）のベンチに座り、昼食のために食べていたパンが余ると、そのパンを前のタイル張りの床上にほうり投げる。すると、周辺のビルの屋上にいたハトが一斉に舞い降りてくる。多くのハトが群がって、パンのかけらをつつきだす。パンのかけらはまもなく粉々になる。彼らは破片をついばむと、首を振り回して、食いちぎる。小さい破片が飛び散る。それが周りに行き渡るから、他のハトは、そのおこぼれにありつくことができるわけだ。群がったハトたちが、ほとんど均等にパンのかけらを食べることになる。その食べっぷりがよい。

しかしときには、ハトが群がるとまもなく、一羽の黒く大きい鳥が舞い降りてくることがある。カラスが飛んできたのだ。弱者のハトたちはさっと逃げる。場所を明け渡すように退く。ハトのいなくなった丸い床面の中にパンの大き目の破片が残っていると、カラスが丸ごとくちばしにくわえて飛び去っていく。

唖然とする私。そして「ああ、持ち逃げするのはずるい。自分一羽で食べるんだろ。そんなヤツにはあげたくないよ」と憤慨する。それにしても、たった一羽のカラスが、圧倒的な数のハトの群れを蹴散(けちら)すのはたいしたものだ。それに対し、ハトたちが集団で対抗しようともしないのは、私としては不満だ。平和主義の鳥らしい。

・生ゴミをカラスが荒らした

ゴミ置き場は、常にカラスに狙われている。住民たちが生ゴミを出すから、それを食べるために、カラスが荒らす。ネットをかけていても、だいたいダメだ。ネットからポリ袋を引っ張り出し、路上にぶちまけてから食い荒らす。

朝、我が家から駅に向かって歩いているとき、道路わきのところどころに複数のゴミ置き場があり、とき

たまそれがカラスに荒らされているのを見る。ネットに重し代わりの棒をつけていても、侵入されている。そして生ゴミのポリ袋の中味を道路上にぶちまける。ポリ袋などは、ずたずたに破られる。ネットの中で食べないのは、いつでも飛び立てるように用心しているためだろう。

それをカラスと断定できないかもしれない。この辺の住宅街ではノラネコの仕業である可能性が少しある。路上に散乱したゴミ類をみて、私は何とかしたいのだが、眉をひそめながらも、ほとんどあきらめて通り過ぎる。街区が自分のところとは違うことだし……。

ちなみに私の街区の置き場は、パイプ組み立て式のネット構造で、ふたを簡単には開閉できないようにしている。たぶんカラスには不可能だろう。たとえ侵入しても、出られない。以前はよく荒らされたから、自治会で金を出して対策してきた。それに、なるべく各戸は、収集車が来る時間の近くに生ゴミを出すようにしている。私はゴミの出し方をよく知らないから、ときどき見張っているらしい隣人に注意されるのだけれど……。

・カラスが襲ってきた

わが市の中央部にやや広い公園がある。主要な運動設備が備えられているので、散歩する人だけでなく、運動する人も多く利用する。たまにそこで私は体を動かす。走ったり柔軟体操をしたりしている。この公園は近年、市が大掛かりな改造工事をした結果、味気ない西洋公園風のものに作り変えられてしまった。自然の樹木がだいぶ失われたし、池の魚を眺めるような風情のある場所もなくなってしまった。地面が舗装されたり人工的なブロックや砂利で敷き詰められたりするところが多くなったので、私としては興ざめしている。生物が住みにくい場所になってしまっている。夜になるとバラ園のイルミネーションがネオンサインのように光る仕組などは、ほとんど余計なことだ。

ある日（２０１８年５月３０日）朝の早い時間に陸上競技場の周辺の芝生エリアで運動していた。この周囲には高い雑木もあり、公園の改造工事を免れた場所だ。それでも、老木のサクラが何本か切られ、整地された。某公共施設が開館する前の数十分のあいだに軽く運動する。その一つとして、樹木の根本にあった石片を拾い、投球のまね事をしていた。石は握ったままで飛ばさない。右投げ、左投げのルーチンをこなす。

そのうち、樹林の上の方から、カラスの鳴き声がし

てきた。2羽のカラスがうるさい。それが警戒するような鳴き声なのだ。見回すと、もう1羽、別の小さいカラスが雑木林の奥の地面にいるのに私は気づいた。それは首を伸ばして、辺りをうかがうかのようだった。よく見ようとそれに近寄ろうとしたら、上のカラスが大きく鳴いた。すると、ばさばさと羽ばたき音が近くに聞こえた。一羽のカラスが舞い降りてきて、私の頭上近くにくると、すぐに飛び去った。明らかに私を威嚇するための行動だった。これでは地上にいるカラスに近づくどころではない。頭をくちばしでつつかれでもしたら大変だと思った。このときは帽子をかぶらず、頭が無防備だった。私は、いささかの恐怖を感じ、そばの木の根元に転がっていた1メートルほどの長さの枯れ枝を拾うと、剣道の素振りのようなことをしてみせた。これも私がときどき行う柔軟体操の一つなのだが、カラスごときに負けまいという意地を彼らに見せ付ける意味があった。でも、早々に引き上げた。カラスは背後から舞い降りてくるので、恐ろしい。後ろを警戒しなければならないことに不安を感じた。舞い降りて来るときは羽音を立てないから気づきにくい。空を飛べるものに対して地上にいる者は不利だ。

数時間後、私が某公共施設を出て昼食を食べに行こうかと近辺を歩いていると、建屋の高い屋根の上に止まっている1羽のカラスが見えた。こちらを見下ろしているかのようだった。まもなく私の背面から、滑空するように飛んできて頭上を掠(かす)めた。今朝出会ったカラスと同一のものに違いない。たぶん、公園隅の地面に降りていた（巣から落ちていた？）小さめのカラスは彼らの子どもだろう。私をそのヒナに危害を加えようとする不審者として親鳥が執念深く見張っていたのだ。

私はすぐに逃げた。おそらく、投球動作もカラスが嫌がることであり、それが彼らを刺激したらしい。